



あなたが考えたトイレにちなんだ回文(廁処回文)をお待ちしています。
回文にペンネームを添えてメールでお送りください。あなたの回文がかわや版の紙面を飾るかも!!
amenity@do-amenity.co.jp

日本水循環文化研究協会

第12回 リレーコラム

特定非営利活動法人日本水循環文化研究協会とは…
本コラムでも取り上げられている尿関に関わる文化や国内外の水の循環をめぐる文化の発掘、普及、継承を目指して活動しています。2022年日本下水文化研究会から改組しました。



総合トイレ学研究家の森田英樹さんのコラム、今回はどんな話題が飛び出すでしょうか。

“スカラベ”のはなし

近年の夏の暑さは凄まじく、年ごとに太陽はその火力を増し、下界の私たちを見下ろしているかのようです。1日も休むことなく地平線から必ず姿を現し、ギラギラと壮絶なパワーを放ち地平線へと姿を消す太陽は、古代エジプト人にとっては最高神とされていました。エジプトの王は、太陽神ラーの子として人々を支配していました。

そんなエジプトにはコガネムシ科に属するスカラベという昆虫がいます。スカラベはタマオシコガネの事で、フンコロガシとも呼ばれる糞を食べる糞虫です。カブトムシもコガネムシ科ですが糞は食べません。スカラベは、適当な糞の山を見つけると、ギザギザの付いた頭の縁と前足をシャベルのように使って、糞の山から球形をくり抜きます。私たちが転がしながら雪ダルマをつくるの

とは違い、ヘラのような前足を押し当て器用にきれいな球体を作り上げます。そして、後ろ足で玉を抱え、前足で右、左、右、左と交互に押しながら後ろ向きに玉を転がしていきます。安全な所まで糞玉を運んだスカラベは、地下室を造り、そこで安心して食事を楽しむ事になります。また、スカラベは糞玉に産卵をし、幼虫は糞玉を食べ成長し糞の塊から姿を現すのです。

このように器用に玉をつくり、忙しそうに玉を転がして行く姿を見た古代エジプト人は、スカラベを東から西に、1日かけて太陽を運ぶ神の化身と考えるようになり、スカラベの姿神ケブリが崇拜されました。ケブリ神は、朝のケブリ、真昼のラー、夕刻のアトウムと呼ばれる太陽神の3形態の一つとされ、男性の体に頭部がスカラベになって

いる姿で描かれます。

さて、このように太陽の運行を司っているスカラベですが、世界的には、アフリカからヨーロッパ、朝鮮半島まで広く分布しています。しかし、日本では見る事ができません。もし、今後日本でスカラベが確認されたとしたら、果たしてケブリ神は日本の夏をどのようにするお考えでスカラベを遣わされたのでしょうか。



糞玉を運ぶスカラベ(ぬいぐるみ):筆者蔵

編集後記

実はかわや版の毎号の制作にあたっては、セミナーやシンポジウムを通じてトイレに関する最新情報を得たり、テーマにふさわしい専門家をご紹介いただいたり、日本トイレ協会様には多大なご協力をいただいています。あらためて振り返ると、トイレの問題を積極的に提起し、オープンに議論を重ねてきた日本トイレ協会の姿勢こそが、日本のトイレ文化を牽引してきた原動力だったのだと感じています。(セルベッチオ中嶋)

information!

第41回全国トイレシンポジウム開催

2025年11月10日(月) 機械振興会館 地下2階 多目的ホール

参加費無料 オンライン配信も予定しています。

参加申し込みは日本トイレ協会HPより

詳細はこちらから▶



あなたの町のアメニティネットワーク

アメニティ本部フリーダイヤル 0120-57-1110



特集 トイレは社会の鏡

jta 日本トイレ協会40年の歩み

今年で設立40周年を迎えた「一般社団法人日本トイレ協会」。
これまでの『かわや版』にもたびたび登場してきたこの協会は、
トイレ文化の創出から社会的課題の改善まで、
幅広く活動しています。
では、実際に協会ではどんな人たちが、どんなことを
しているのでしょうか？
その舞台裏、ちょっとのぞいてみませんか。



物語は新橋から始まった

時は1984年、当時はまだ公衆トイレが「汚い・暗い・くさい・怖い」の4Kと言われ、トイレが社会課題として浮かび上がり始めた時代。日本は高度経済成長を経て生活の質が問われるようになり、都市化・高齢化・バリアフリーといったキーワードが目立っていました。

そんな中で、東京・新橋で「トイレ読者の会」というトイレを語り合うサロンの

な集まりが発足しました。その風変わりな集まりはメディアにも取り上げられて話題に。そして翌1985年に日本トイレ協会が正式に設立されました。創設メンバーには、研究者、医者、経営者、メディア関係者などが参加し、トイレを「社会の鏡」として捉える協会のユニークな視点を形づくっていきました。

そこにいたのは トイレ愛あふれる人々



トイレ協会に入会するのに特別な資格は必要ありません。建築家やデザイナー、医療・福祉関係者、自治体職員、トイレ関連企業の社員、研究者、学生など「トイレが好き」「トイレを良くしたい」「トイレに関心がある」という人ばかり。近年では大学生や若手社会人による「flash(フラッシュ)」という若手会員グループも活動中。フレッシュな視点が加わっています。



多岐にわたる日本トイレ協会の活動

研究・啓発活動

- ◎全国トイレシンポジウム トイレをめぐる課題や可能性を議論する公開イベント
- ◎「うんと知りたいトイレの話」シリーズ 専門家や実践者による分野横断的な情報共有
- ◎研究会活動(災害・バリアフリー・メンテナンスなど) 実態調査・研究→論文・書籍として成果公開。トイレ文化の土台を築く

社会・国際連携

- ◎自治体・企業との協働 公共空間や商業施設のトイレ改善のアドバイザー的役割
- ◎海外トイレ協会との交流 トイレ政策の知見交換、国際フォーラム

表彰・普及活動

- ◎トイレの日(11月10日)制定 トイレへの関心を広げるきっかけづくり
- ◎JTAトイレ賞の実施 トイレ文化活動や環境の創造に対して尽力された方を称えさらなる深化を醸成



日本トイレ協会40年の活動

1984

日本トイレ協会の前身となるトイレトピアの会発足。

公衆トイレは“4K”(汚い・暗い・くさい・怖い)と呼ばれ、社会課題に。



1986

第1回全国トイレシンポジウム開催(伊東市)。「トイレの日」制定(11月10日)。グッドトイレ10の選考始まる。

TOTOウォッシュレットの「おしりだって洗ってほしい」CMが話題に。



1992

メンテナンス研究会発足。清掃・維持管理の専門的研究が始まる。

地球サミットで「リオ宣言」「アジェンダ21」採択。環境と開発の両立を目指す国際的な枠組みが誕生。



1995

阪神淡路大震災でトイレボランティア隊が活動。トイレ清掃や実態調査などを行い、後の災害時のトイレ対策に繋がった。

災害時のトイレ問題が初めて浮き彫りになる。



2000

次世代トイレ研究会発足。未来のトイレ像を探る研究が始まる。

IT革命。温水洗浄便座普及率50%超え。交通バリアフリー法施行で公共交通機関のバリアフリー化を推進。



2009

NPO法人日本トイレ研究所と分化。トイレ文化と社会事業の両輪へ。

政権交代で民主党政権誕生。事業仕分けが話題に。



2016

一般社団法人化する。

熊本地震。政府のプッシュ型支援で仮設トイレや携帯トイレなどの物資が被災地へ送られた。



2020

若手の会「flash」が誕生。トイレ文化に若い感性と発信力が加わる。

コロナ禍のパンデミックで生活様式が激変。オンラインやSNSが生活インフラに。



1985

日本トイレ協会 設立。

男女雇用機会均等法成立。女性の社会進出が進む。



1989

第一回日仏トイレフォーラム開催。トイレを文化・空間として語る国際交流が始まる。

湾岸戦争、ソ連解体。世界が揺れる中で、生活空間の質への関心が高まる。



1993

世界初の国際トイレ会議(神戸)開催。

Jリーグ開幕。スタジアム文化が育ち、公共施設の快適性に注目。環境基本法成立。



1997

ノーマライゼーショントイレ研究会発足。トイレを通じて自立と尊厳を考える。文部省の後援で学校トイレフォーラム開催。

山一證券破綻。金融不安が広がる。



2005

愛・地球博に「トイレ探検館」出展。

環境・ユニバーサルデザインへの関心高まる。



2011

災害とトイレのシンポジウム開催。

東日本大震災。「トイレに行けない」ことが命に関わることに浮き彫りになった。



2019

災害・仮設トイレ研究会発足。トイレが命を守る防災インフラへ。

台風19号など災害多発。避難所の衛生環境が課題に。令和改元で時代が動く



2024

能登半島地震での調査・支援活動。

能登半島地震で災害トイレの重要性再認識。「誰一人取り残さない」インクルーシブ防災が社会の共通認識に。



1984 1990 1995 2000 2005 2010 2015 2020 2025

日本トイレ協会の
主な書籍の発刊



1987

トイレの研究ー快適環境を求めて総合的に科学する



1993

日本のいいトイレ
グッドトイレ10入選トイレを紹介。



1997

トイレメンテナンスマニュアル
日本で初めてトイレ清掃をマニュアル化した冊子として高い評価を受ける。



2001

トイレのなぞ48

トイレから考えようシリーズ

トイレという身近なテーマを通して、環境・バリアフリー・社会のしくみについて考える力を育むことを目的とした全3巻のシリーズ。教育現場での総合学習にも活用される。



2015

トイレ学大事典

トイレを学問として体系化した初の総合事典。



2022

進化するトイレシリーズ

トイレを単なる設備としてではなく、人間の尊厳・社会の成熟・未来への課題として捉え、「災害とトイレ」「快適なトイレ」「SDGsとトイレ」の3つの切り口から深く掘り下げている。



日本トイレ協会40周年に寄せて 日本トイレ協会 会長 山本耕平



1984年、公衆トイレの環境改善を願う有志によって始まった活動が、今日ではトイレの快適性や技術向上を追求する幅広い取り組みへと発展しております。当時は4Kと言われていたトイレも、今では設備や器具の改良に加え、世界がうらやむ清掃・メンテナンスの充実、利用者マナーの向上、著名な建築家が手掛けた公衆トイレの登場など、日本のトイレは著しく進化しました。

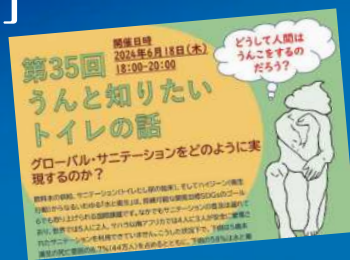
しかし、今も世界では34億人が安全なトイレを使用できず、4億人が屋外での排泄を余儀なくされています。ジェンダー平等や災害時の対応、幼児や障がいのある方々への配慮など、トイレをめぐる課題は少なくありません。

私たちは、団体や組織の枠を越え、トイレに関心を持つ仲間とともに、ゆるやかな交流の場として協会を育んでまいりました。これからの10年、20年も、あらためてこの理念を共有して歩みを進めてまいります。

● トイレを知るオンライン講座「うんと知りたいトイレの話」

● 2021年から月1回開催している「うんと知りたいトイレの話」は、災害、福祉、ジェンダー、環境など多角的な視点から“トイレを通して社会を考える”オンライン連続セミナー。その分野の第一人者や専門家との対話を通して、トイレについて楽しく学ぶことができます。学生や一般の方の参加也大歓迎。さらに、オンラインだけでなく、普段は入ることのできない施設の特別見学などフィールドワークの機会もあり、トイレ文化の最前線にふれることができます。● トイレにちょっとでも関心があるなら、一度のぞいてみませんか？

- 頻 度：月1回(原則第3木曜 18:00~20:00)
- 形 式：Zoomによるオンライン開催(全国どこからでも参加OK)
- 対 象：トイレに関心のあるすべての人(会員・非会員問わず)
- 参加費：トイレ協会会員：無料／一般：1,000円／学生：500円
- 申込方法：日本トイレ協会公式サイトまたはEventRegistの専用ページから事前登録(UDトークによる字幕表示あり。手話通訳希望は事前申請制。)
- 詳しくは日本トイレ協会ホームページで。



● まとめ

● 赤ちゃんから高齢者まで、ビジネスパーソンや観光客も、誰もが使うトイレは「社会の在り方を映す鏡」とも言えます。日本トイレ協会は、40年前からその意味に気づき、トイレ文化に向き合ってきました。● バリアフリーや災害時の対応、公衆トイレの快適性や衛生管理、多様性への配慮など、さまざまなテーマに取り組み、少しずつ社会の「当たり前」を変えてきました。● トイレの男女比やジェンダーフリートイレなど、まだまだトイレの問題は山積みです。● 誰もが安心して使える未来のトイレ文化は、私たち一人ひとりの気づきと声によって育まれていきます。● 日本トイレ協会がそんな声を拾い上げて新しいトイレ文化を育てていくことでしょう。